

黄昏ではなく曇天のイギリスから

百合野 正博

黄昏ではなく曇天の イギリスから(その一)

百合野 正博

アカウンター

所得税の確定申告に必要な書類を家内に日本から送らせる際、念のため「書留速達航空便」にした。ところが、それより後の消印の普通航空便が三、四日で届くの、これが一向に届かない。そこで、郵便局で調べて貰うよう家内に電話をかけたが、日本から調べるとは二千六百円かかるのでイギリスで調べた方がよいと言われたとのこと。寒いので本局まで行くのに躊躇しているうちに、八日目になってようやく届いた。普通便の倍の日数がかかったのだから速達料金を取り戻してやるうと思つてその請求に行かせたら、今

度は配達日の証明が必要とのこと。書留も速達も余分の料金を支払っているのに一旦事故になるとこんなに手数料がかかるとは釈然としなかったが、国際電話の料金だけでも経費倒れ、不承不承諾めた。(これにはまだ後日談があるが、紙幅の都合で省略。)

一方、イギリスの郵便局には、郵便料金表などと一緒に『コード・オブ・プラクティス』というパンフレットが置いてある。冒頭に「郵便局は出来るだけ最善のサービスをお客様に提供するとともに、お客様に接する態度が完全にフェアであることを目指しています」と書かれたこのパンフレットは、イギリス郵政の提供するサービスの標

準的内容(例えば、ファーストクラスの郵便物の九〇%は翌日配達)を説明した後、万一、不着・破損・遅延などが生じた場合の苦情の申し立て方が具体的に説明されている。これを読むと、国内郵便の速達郵便物が投函の翌日に配達されなかった場合には無条件で速達料金を払い戻すと書かれている一方、外国郵便に関しては速達扱いでも配達日は保証しないし、調査のため間接経費も負担しないことが明記されている。責任の範囲が明確に述べられているわけだ。もしも日本でも同様の規定があつて、そのことがこの種のパンフレットで周知されていたら、私も国際電話なんかかかかなかつたらうにと思う。

パンフレットといえは、ブリテイッシュ・テレコムから三月に電話料金請求書と一緒に小冊子が送られてきた。その表紙には、正義の女神が左手に持っている天秤が傾いているデザインの下に「四人に一人の利用者しか番号案

売出広告が載っていたが、「お申し込みみに当たっては、各社の目論見書をご覧ください」と明記されてはいたものの、それがどこで手に入るかは書いてなかったし、株式投資に対する注意書きもついていなかった。NTTの株式公開に際して、目論見書なんて買うことが出来たのだろうか。(ちなみに、売し価格は一株二ポンド四十ペンス、最低購入株式数は百株、予想配当利回りは最低の会社でも八・〇三%。自分の住んでいる地域の電力供給会社の株を買えば電力料金の値引きというインセンティブもついている。まさに、誰でも投資出来るリースナブルな条件ではないか。)

積極的に説明をするのは最初の売出時だけではない。決算発表日における企業経営者も実に雄弁。日本でも日経新聞系列のテレビ局は経済ニュースに力を入れている印象を受けるが、こちらでは、BBC・民放とも、一般ニュースの時間内にビジネス関係のニュー

とも出来る。NTTも番号案内を有料化したのが、利用者にこのような説明をしたのだろうか。

NTTといえば、例の株式公開の



宿舎前庭の桜

時、証券会社のギャルが街頭に繰り出してお祭り騒ぎで登録書類を配布していたが、この国の民営化企業の株式の売り出し方は日本とは違っていた。昨

年の秋にイングラッドとウニールズの電力供給会社の民営化が行われて株式が公開された際、テレビ・ラジオ・新聞などで流された広告は膨大な量だったが、その内容は一貫して、電力供給会社の株式が一般に公開されるので「〇二七二二二七二二に電話をかけて目論見書を請求して下さい」ということだけを訴えるものだった。試しに申し込んでみたら、都合三回送られて来たパンフレットのメインは、民営化される十二社を詳細に説明したA四判六四ページの、しかしミニという修飾語のついた目論見書だった。そして、パンフレットにも新聞広告にも「株価は値上がりすることもあれば値下がりすることもある。アドバイスが必要な場合には適切な専門家に相談されたし」との注意書きもついていた。まさに、必要な説明をして、後は投資家本人に考えさせるという姿勢が強く感じられた。同じ頃、日本の新聞にもイギリスの新聞で見かけたのと同じデザインの

スを報じる枠を設けているだけでなく、独立した経済ニュースを毎日三十分ずつと、週に一度は「ンティー関係」と銘打ったニュース番組を放送している。その毎日の経済ニュースの中心トピックスの一つが上場企業の決算発表。

業績の良くなった会社も悪くなった会社も、社長、会長もしくは財務担当重役自らがインタビュアーの質問に一つ一つ丁寧に答えるのが実に印象的。ちなみに、最近決算を発表した各社がどうだったかみてみよう。英国航空の場合、税引前利益が前年の三分の一近くに落ち込んだが、社長は、ガルフ戦争や景気後退などその原因を列挙して、やむを得なかったと釈明した。インタビュアーは、そこには理解を示しながらも、さらに従業員が解雇が行われるのかどうか迫っていた。対照的に、ブリティッシュ・テレコムは三〇億ポンドにもなる利益を計上したが、スタジオには来ずに電話で(一)対

応する社長に対して、インタビュアーは案の定、電話料金が高すぎるのではないかと食い下がっていた。(この回の電話料金は本場に高い。)しかし、社長は、壊れて使えない公衆電話の数が激減していることに象徴される企業努力の現れだとあっさりかわした。同様に利益を伸ばしたヨークシャー水道もブリティッシュ・ガスも、利用者から不当な利益を得ているのではないかと厳しく追求されていたが、後者の会長は、今年の冬が四年ぶりの寒波だったことが影響したのであって、決して儲け過ぎではないと釈明していた。スタジオでは、そのやり取りを聞いてRPMGやPWなどに所属する会計士がコメントをする。

株主総会も、新聞報道を読む限り、日本の「しゃんしゃん」総会とは様子がずいぶん違っている。経営陣は総会を早く終わらせようなどとは考えずに、ちゃんと説明するし、個人株主からの素朴な質問にも誠実に答えてい

内を利用してないのに、どうして全員がそのコストを負担しなければいけないのか?」という文章。表紙をめくると、その天秤がちゃんと釣り合っているデザインの下に「四月二日から不公平を是正します」という太字。要するに、ブリティッシュ・テレコムが番号案内を有料にする根拠を述べたもの。調査によれば四分の三の加入者が番号案内を利用してないのに、その費用を全員が電話料金一ポンドにつき六ペンス負担しているのはフェアだろうか、という問いかけで始まり、番号案内を利用者負担とする代わりに国内電話料金を平均六%値下げする、但し電話帳の使えない盲人などの障害者や公衆電話の利用者はこれからも無料で番号案内が利用出来る、といったことが分かりやすく説明されていた。具体的なQ&Aもついていて、読んでもなると納得。読んでもなお疑問がある場合には、毎日午前八時から午後八時まで着信払いの無料電話で質問するこ

る。例えば、マークス&スペンサーという大きなスーパーマーケットチェーンの株主総会では、売り場で試着出来なかつたり、クレジットカードが使えないのは不便だという意見が株主から出された。それに対して、社長は、試着コーナーを作ればそれだけ売り場面積が狭くなるし、監視のための従業員も雇わなければならないのでコストアップにつながり、結局販売商品の値段に跳ね返ることになる。返品と交換を自由に認めているのだから、それで十分ではないか。また、クレジットカード会社に支払う手数料もコストアップにつながる。もしもカードを使いたければ当社のカードをお作り下さい。実に明快な答えだと思ふ。

個人株主を大切にするのは個人株主の数が多からかというところ、そうではなくて、この国の個人株主比率は日本とほぼ同じ。要するに、こちらの経営者は企業内容について株主に説明する責任を負っているという意識を持っているのだ。そして、その説明が新聞やテレビを通して日常的に一般の人々（潜在投資家）のもとに届けられている。しかし、何と言っても、よく説明するのは政治家。実は、この国に来た当初、ポリティシャンという言葉はよく見聞きするが、ステーツマンという言葉はまったく見聞きしないので、自分の国の政治家をすべて「政治屋」と呼ぶのはイギリス人お得意の皮肉なのかと思っていた。なぜかと言うと、例えば、日本の新聞の投書欄で「日本にはポリティシャンばかりいて、ステーツマンはいない」などという文章をよく見かけるように、日本では、ポリティシャン＝政治屋、ステーツマン＝政治家、という訳訳が定着しているように思うから。しかし、イギリス人に尋ねてみると、「チャーチルは偉大な政治家だった」という文章の場合には特別にステーツマンを使うが、普通はポリティシャンを使う、ポリティシャンには別に悪いニュアンスはない、とのこ

るのだ。そして、その説明が新聞やテレビを通して日常的に一般の人々（潜在投資家）のもとに届けられている。しかし、何と言っても、よく説明するのは政治家。実は、この国に来た当初、ポリティシャンという言葉はよく見聞きするが、ステーツマンという言葉はまったく見聞きしないので、自分の国の政治家をすべて「政治屋」と呼ぶのはイギリス人お得意の皮肉なのかと思っていた。なぜかと言うと、例えば、日本の新聞の投書欄で「日本にはポリティシャンばかりいて、ステーツマンはいない」などという文章をよく見かけるように、日本では、ポリティシャン＝政治屋、ステーツマン＝政治家、という訳訳が定着しているように思うから。しかし、イギリス人に尋ねてみると、「チャーチルは偉大な政治家だった」という文章の場合には特別にステーツマンを使うが、普通はポリティシャンを使う、ポリティシャンには別に悪いニュアンスはない、とのこ

と。どうやら我々はアメリカ英語に慣れすぎてしまっているようだ。そういえば、イギリスでは、自己紹介をする時に、自分の専門のことを「メージャー」とはいいないし、トイレをちゃん（ちゃん）「トイレット」という。アパートにマンションなんて名前をつけるのが、外国人に笑われるとよくいわれるが、ロンドンを歩くと、集合住宅に「マンション」と名前がつけられているのをよく見かける。どういったことかは、我々が普段英語だと思っている言葉のかなりのものが、実はアメリカ英語だということに基づいているわけだ。

それはさておき、この国の国会議員が皆政治屋に見えるかというところ、決してそうではない。この国の政治家は、大変真面目に「政治に励んでいる」という印象を受ける。その最大の理由は、この国にとって今何が政治課題なのかを、政治家本人が自らリアルタイムで国民に説明するからではないかと

思う。

例えば、この原稿を書いている五月下旬現在、何がその対象かというところ、一つは、六歳の女の子がブリテリアに噛まれて顔死の重症を負った事件に関連して、内務大臣が猛猛な犬を飼うことに關して飼主の法的責任をはっきりさせたいとの意向を示している。（犬が人間を噛んでもニュースにならないが、人間が犬を噛むとニュースになる、というのも大嘘。）そして、二日後には、ブルテリアや土佐犬などの闘犬用の犬の輸入を禁止し、すでに飼われている分については処分する方向を明らかにした。（この国で名だたる英国動物愛護協会が一万匹の犬が「殺される」のを黙って見過ごすか？）

国民健康保険制度（手術の順番待ちが九カ月という一方で赤字の病院が閉鎖されるという状況は尋常ではない。たとえタダでも、私はこの国で医者にかかりたくない）、や教育制度（イギリス政府は学校でも塾でも猛勉強させて

いる日本が羨ましくて仕方ない様子の改革も緊急の課題となっている。

そして、その対応については、TVのニュース番組その他の中で、ニューズカースター（イギリス式発音）から直接質問を受けてその場で担当大臣本人が説明することが多いので、国民は問題についての情報を共有することが出来る。その担当大臣の発言に対して、ただちに、影の大臣や第三党の担当議員が自分の党の考え方を説明するので、国民は政権を担っている党の政策と野党の政策のどちらが良いかを判断することが出来る。

日曜日の朝八時から九時二十五分までの『プロスト・オン・サンデー』という政治関連トーク番組にも、同じく日曜日の午後一時から二時までの『ウォールデン』や『オン・ザ・レコード』という政治インタビュー番組にも、総理大臣や労働党党首こそ滅多に顔を見せないが、大臣や影の大臣、第三党の自由民主党党首、およびこれまでの党

首・閣僚経験者などのうちの誰かが出演して、聞き手から鋭い突っ込みを受けている。（日本の政治家だったら、失敬など怒り出すのではないかと思われる場面を何度も見た。）ほとんどが生番組なので、そこで話をしたことが、直後のニュースで取り上げられたり、翌朝の新聞記事になったりする。今は昔、日曜日の朝、小浜利得の『時事放談』を見て政治の動向を知った気になっていた日本人は何と脳天気な国民だろっと思ってしまう。

さらに、BBCで毎週木曜日の夜十時から一時間、これも生で放送されている『クエスチョン・タイム』という公開番組では、BBCのニューズカースターの司会のもと、毎回四人の政治家が数十人の一般参加者の見ている前で、一般参加者からの質問に答える形で、その時々々の政治課題について討論し、途中でも一般参加者からの質問にその場で答える。一時間というのは、その週に問題になっている四つか五つ

黄昏ではなく曇天の

イギリスから(その二)

アカウンティイ

イギリスに数カ月以上住んでいる日本人に出会うと、日本人とイギリス人がどのように違うと感じているかを聞かせて貰うことにしている。

先ず、かなりの人たちが、イギリス人は不潔だと言う。確かに、彼らは一週間に一・二度しかお風呂に入らないようだし、部屋の中で靴を脱がないのは仕方ないとしても、その土足で歩いている床に落としたクッキーやサンドイッチを拾ってそのまま食べても平気。中には自分の指に唾をつけて靴をみがく人間すらいる。(実際、その人の口の中が真っ黒になるのをこの目で見

百合野 正博

た)。やっとハイハイを始めたばかりの赤ん坊が病院の廊下を這いずり回った後にその手をなめても、こちらのお母さんは別に気にならないらしい。

しかし、一方、イギリス人はイギリス人で、自分以外の人間がつかったお湯にそのままつかる日本式のお風呂は不潔だと感じているし、家の中で靴を脱げば足が臭くって不快ではないかと思っているらしい。洗剤をきれいに流し落とさないまま食器を拭くことは許せても、自然乾燥はイヤ。思うに、これらは長い間に肌にしみてしまった習慣の違いだから、溝を埋めるのはそう簡単ではなさそうだ。イギリスでは音をたてないでスープを飲んで、く

しゃみはかみ殺すように努力し、日本に来たイギリス人には、うどんやそばは派手な音をたてて食べた方が美味しそうに聞こえるが、食卓ではハナをかまない方がよいと教えるしか仕方がないのかも知れない。

また、イギリス人は勤労意欲が乏しいという印象を持つ日本人も多い。平日の真っ昼間からパブでビールを飲んでいるし、夕方になると残業なんかしないでさっさと帰ってしまう。家に帰ったら近所のパブでまた一杯。デザートも、閉店時刻になると客を追い出すとするだけでなく、稼ぎ時のはずの日曜日にはほとんどの店が閉まっている。これではイギリスの経済が傾くのも当たり前、というわけ。

しかし、こちらの方は、少しイギリス流に視点を変えたと違って見える。ビールを飲んでも午後からの仕事に差し支えなければ問題は無いだろう。デパートの店員も閉店後のプライベートな時間を有効に使う権利はあるわけ

の論議について十分議論出来る時間だということを知った。何も、一晩かかって朝まで議論する必要はない。

これらの番組を見ていて感じるのは、イギリスの政治家は、重要な政治課題について国民に詳しく説明をして国民に納得して貰ったうえで、国民からの支持を得ようと考えていて、それを実践しているということ。国会の廊下でちょっと立ち止まって、取り巻きの新聞記者に少しだけ情報を「漏らす」ような印象を受ける日本の政治家とは根本的に意識が異なっている。この国では、「有力筋の話」などという怪しげなニュース源は、こと国内問題に関しては存在していない印象を受ける。このように、イギリスの政治家や企業経営者が詳細に説明するのを目の当たりになると、なるほど、政治家は国民から付託を受けて政治に携わっており、企業経営者は株主から資本を委託して企業経営を任されている、したがってそのアカウンタビリティを果

たさなければならぬと考えているというところを肌で感じる事が出来る。

ところで、二十数年ぶりにこちらで

映画『ロシアより愛をこめて』を見た。最後に、ゴンドラに揺られながら、ジェームス・ボンドがトルコから連れだしたロシア人女性から夫婦を偽装するのに使った指輪を返して貰う場面がある。日本人だったら「今回の記念に取っときたまえ」とか何とか言いたくなるところだが、彼はきっちり返して貰って、「この指輪は国から支給されたのでアカウンタブル」だと言う。前に見たのは高校生の時だったからそんな台詞には気がつかなかったが、これを聞いて思わず吹き出した。彼のようない「殺しのライセンス」を持っている人間ですら、国有財産についてアカウンタビリティを負っているんだ、さすがイギリス映画だと妙なところで感心した。

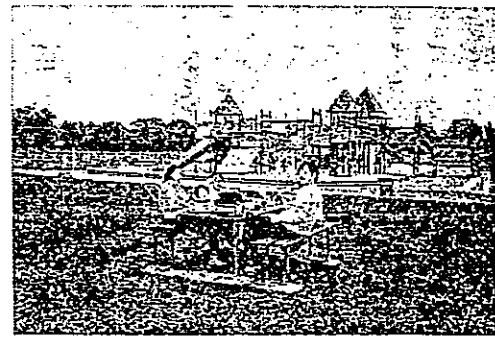
(筆者・在イギリス・同志社大学助教授)

* * * * *

で、閉店間際に買い物をする客の方が厚かましい。日曜日に店が閉まっているといっても、イギリスは週休二日制なのだから買い物は土曜日に出来る。

もう一つ、日本は階級社会ではないがイギリスは階級社会だと思っている人も非常に多い。確かに、七十億ポンドの財産を有するイギリス一のお金持ちのエリザベス女王が君臨しているし、(美術と親しく話したことはないが)貴族もいる。敷地内にゴルフ場があるなんていう程度ではなく、遙か地平線が見えそうな広いお屋敷に住んでいる人もいる。身近なところでも、例えば、寮での朝食の際、ほとんどの学生がTシャツにGパン姿なのに、中に一人いつもネクタイをきちんと締めてチョッキを着ている学生がいる。彼はこの寮の学生自治会の会長で、フォー

マル・ディナーのたびに燕尾服を着て、長いが退屈させないスピーチをする。寮長によると、彼は「いいところの出」だとか。気障なメガネも、食後



近くのテムズ河畔の公園にて

の葉巻の吸い方も、びたっと決まっています、まさにハイ・ソサエティの雰囲気か漂っている。(寮長自身、自らジュントリイの出だと公言しているよう

に、ずいぶん昔まで系図が廻れるそうだし、彼の家の居間の壁に掛かっている何枚かの大きな油絵はすべて彼のひいじいさんの頃の一族の肖像画とのこ

と。)それに、寮の食堂の一段高いところには「ハイ・テーブル」と呼ばれるナブキンとマットの用意された特別のテーブルがあって、先生たちは学生とは別にそこで食事をとる。なるほど、イギリスには階級がある。

それでは、日本には階級はないのだろうか。象徴としての皇室はあっても貴族はいないし、日本人のかなりの人たちが自分では中流の上に位置すると信じている。そして、日本の大学教授は地下の学食で学生と同じテーブルについてラーメンをするではないか。(まさか、我が同志社だけでは?)なるほど、日本は階級社会ではなさそうだが。しかし、イギリスにしばらく住んでいるうちに、これをそのまま鵜呑みにしてよいのだろうかと素朴な疑問を感じるようになった。実際、私の回りに、この国に来て改めて、日本が上下関係を非常に気にしなければならぬ社会だということに気づいた人たちが何人もいる。

例えば、日本にいた時には自分の先生に論争を挑むなどということは多く出来なかったが、イギリスだと先生の名前をファーストネームで呼べるし、友達と話す時と同じように敬語を使わないで話せるので、偉い先生とも應ずることなく自由に議論出来る、と日本から来た大学院生は感想を漏らす。実際、この国のインタビューアーは、総理大臣を「ジョン」と呼び、私の耳にはズケズケものを言っているように聞こえるし、ジョンの方も居丈高ではない。日本にも、昔「栄ちゃん」と呼ばれた」と言った総理大臣がいたが、実際に委員会で「栄ちゃん」と呼ばれたらぎよると目玉を刺したことを思い出す。(正直な話、私自身「マサヒロ」と名前を呼ばれると何となく呼び捨てにされているような気がして居心地が悪く、日頃顔を会わせる機会の多い女性秘書には日本語を教えるついでに日本の慣習だと説明して、今では「ユリノ・センセー」と呼んで貰って

いる。) また、四つのチャンネルしかないこの国のテレビを見てみると、日本人なら「目上の人」と感じてしまう相手に



テムズ河畔の公園にて

対して、イギリス人が卑屈になっけないことに気がつく。この国のテレビで数の多い二大番組のうち、他愛のないコメディイブ、ど

れも代わり映えのしない日常会話が、家の中やパブで繰り返されるだけで、よくまあこんなものが三十年も続いていて、しかも視聴率のトップを保持しているものだと呆れてしまう。『バス通り裏』が今も休みなく続いていて、各局が競って類似番組を作っているなんてことは日本ではちょっと想像出来ない。もう一方の、善のある風刺番組後者の類の番組も、日本ではちょっとお目にかかれない。と言うのは、そういう番組で揶揄のターゲットにされているのは、多くの場合、女王一家や政治家だから。

例えば、一週間の内外の出来事に関してコラムニストや政治家が解答するクイズ番組がある。トラックの列に突っ込んだ乗用車の写真を問題に出されて「速度違反の罰金を払に行った帰りにまた事故を起こしたアン王女の車」などという出題言を解答してスタジオ参加者を沸かせたと、真面目に、「フランスの農民がイギリスからの

畜産物の輸入阻止のために作ったバリケードに……」とちゃんとした解説を始めるという具合。確かに、その週のタブロイド新聞の一面を飾ったのがアン王女のスピード違反だったが、それにしては天下のBBC2の番組でそれをもう一度蒸し返すとは……。

また『どつきりカメラ』風の番組では、チャールズ皇太子の息子という設定の子供が玩具屋にやって来てわざと店内をめちゃめちゃにしたあと、呆然としている店員に、皇太子、皇太后、サッチャー首相(当時)から直接お詫びの電話がかかって来るという趣向。次々と偉い人から電話がかかるので動転してしまつて日常語で対応する店員に、皇太后(ものまね)は「私には『陛下』という敬称をつけなくちゃ駄目よ」などとたしなめる有様。日本ならば、直ちに宮内庁から、「陛下はそのような発言はなさらない」とクレームがつくだろう。(そもそも、日本だったら、誰でも顔を知っている皇室の人間

が御付きの人間とシークレットサービスを一人ずつ連れて普通の店に現れただけで、これは『どつきりカメラ』だと気がつくだろうし、さらにいえば、皇族を使うというこの種の設定が番組製作者の頭に浮かぶはずがないだろう。

そういった番組の中でも特に秀逸なのが『スピットイング・イメージ』という有名人のそっくりさん人形を使った風刺番組。毎週、日本人の常識では「右翼からの狙い撃ち」「政治家からの圧力」などという言葉が脳裏をかすめるほど、王室も政治家も散々酒の肴にされている。例えば、サッチャー女史が退陣した翌週には、番組の冒頭、涙にくれながら棺桶の中のサッチャー女史に花を供える列の最後に、日頃不仲を噂されていたエリザベス女王が登場し、何と、棺桶に向かって実に気持ちよさそうに何阿大笑した。また、チャールズ皇太子が落馬して骨折した腕を吊っていた頃、悩ましいネグリジエ姿

でベッドに行こうとしきりに誘うダイアナ妃に向かって、チャールズ皇太子は「医者に止められているから」と寝室に行くのを拒んでいたが、実はその頃のタブロイド新聞は、チャールズ皇太子が昔噂のあった女性とヨリを戻したのではないかという噂で持ちきりだった。そして、メージャー首相は、首相になった当初、サッチャー女史に頭を割られてリモートコントロールの機械を埋め込まれてしまい、頭の上ではサッチャー女史からの指令電波を受けるアンテナがくるくる回っていたが、やがてサッチャー女史の影響から離れたと見られてからは、毎朝ブッシュ米大統領に電話をかけない何と何と決定出来ない顔色の悪い男として扱われている。

このように、この国のテレビはまったく「権力」なんか恐れていない。これは、正直、凄いとびっくりするのを通り越して、一種の感動すら覚える。(日本では、テレビでの笑いの対象はむ

しる弱者ではないだろうか。

このようなイギリスのテレビを見てみると、二つの重要な点に気がつく。その一つは、前回書いたように、政治家や企業経営者が、国民の「代理人」に過ぎない自分たちの立場を十分に理解して、視聴者(「国民」という「主人」)に説明をすることを非常に重要視しているということだが、もう一つは、国民自身が、権力者を笑い飛ばすことによって、彼らにではなく国民に主権のあることをはっきりと示しているということ。そして、実はこの二つの関係が「ニワトリと卵」の関係ではなく、「初めに後者ありき」の関係であることが、この国の日常生活を通して自然に感じられる。つまり、イギリスの政治家や企業経営者がアカウンタビリティを果たすために国民に説明することを重要視しているのは、彼ら自身の自覚に基づいて自発的に行っているというよりも、むしろ、彼らこそせざるを得ないほど強く、国民自

身が、自分たちこそが政治家や企業経営者にアカウンタビリティを果たさせる対象である、すなわちアカウンタビーであるということを意識することにも、それをいろいろなところで明白に示しているからに外ならないということに気がつくのだ。

一例をあげると、イギリス人が政治に関して実に能動的だということを、保守党の党首交代劇の推移を見て実感した。サッチャー首相が退陣を表明して、党首選挙が実施されるのが決まった直後の世論調査では一般国民の人氣はメージャー蔵相に集まっていたが、実際の投票権を持っている国会議員の下馬評では、ハード外相が最有力と見られていた。やがて、各議員は、地元選挙民の意見を聴取するために一斉に選挙区に戻った。テレビで見ると、サンドイツチにフライドチキン、チーズ程度の質素なパーティーにお年寄りも大勢出席して、議員に自分の考えを述べている。その後の投票の結果

はご承知の通り。

この間の推移を見て、イギリスの国民が、単にテレビ番組で政治家を酒の肴にするだけではなく、いざと言う時には、積極的に自分も関与するという姿勢を持っていることを知らされた。だからこそ、議員もそんな国民の考え方を自分の行動に反映させるし、経過に関する説明も詳細に行う(あるいは行わざるを得ない)のだろう。そんなイギリスに住んで外から日本を見ると、日本という国は、一般に平等社会であると言われているし、多くの人たちがそう信じているけれども、実は一人一人の間に細かい上下関係が成立していて、その連続が大きなピラミッドを構築しており、それが日本人の「意識」に大きな網をかぶせているのが感じられる。「主権在民」の意識を強く持っているイギリス人や「納税者」の意識を強く持っているアメリカ人(とはいっても、こちらはアメリカに住んで実感したのではなく、アメリ

カホームコメディーの『コスビー・ショー』を見て感じることを)とは対照的に、日本人は「あなた任せ」。政治が悪い、企業が悪い、などと文句は言うけれども、自主的に考えて、進んで意見を言っ、自らの責任で行動しようとする人は多くない。(NITの株で損をしたのがどうして国のせいなのか?) そんな「無責任な」国民だからこそ、政治家は無視することが出来るし、依然として「お上」が責任を負うという官僚と国民両者の意識もなくならない。

実は、この「お上」なるもの、私は日本にいた頃はついぞ感じたことがなかったが、先日、ロンドンの日本総領事館ではからずも目の当たりにした。窓口が目的別に分かれていたのには気がついてはいたが、すいている窓口の男性職員が融通をきかせて書類を渡してくれたので、書き込んだ後、再びその窓口に出そうとしたら、その時そこに坐っていた若い女性に「何ですか、こ

れは」と一喝されたのだ。申し訳ありませんと平伏しないと後で酷い目に遭わされるのではないかと思えるような口調だったので、頭の中で親に叱られた時の遠い記憶をよみがえらせつつ、一瞬啞然として彼女の顔をぼかんと眺めてしまったが「窓口が違いますよ」のお役所言葉だったらしい。用事を済ませた後、改めて回りの日本人の様に緊張した表情を見て、そうか、ここは「お上」のお役所なんだとハタと気がついた。日本では「お上」は民間よりも上位なんだ。そして、政治家は国民の選挙で選ばれるとはいいいながら、「お上」の最上級に位置している「偉い人」なんだ。だから、財界の人間、民間人は政治家の悪口を言う、たとえそれが事実だとしても、後から誤らなければならぬんだ。そんな事柄が頭の中を駆けめぐった。

一方、このイギリスでは、例えば、グリーン・カードの登録のために所轄の警察署に行ったが、窓口で応対してくれた若い女性も実際に登録手続きをしてくれた中年女性も、いずれも制服を着ていたわけでもなく、応対の仕方もソフトで、こちらがまったく緊張する必要はなかった。私の住んでいる町のタウン・ホールは、住民を威圧するような建築物でないだけでなく、有料とはいえ託児室があるし、入ったところにある喫茶室とバブ(一)では夜になると素人のバンドの生演奏もやっている。「執務時間」ではなく「Open to public」という掲示を眺めていると、これはもう、生半可なものではない、イギリス国民が長く共有している感覚なんだ、としみじみ感じてしまう。

教授)

(筆者・在イギリス・同志社大学助

方) (つづく)

黄昏ではなく曇天の

イギリスから(その三・完)

百合野 正 博

アカウンタント

イギリスの冬は長くて鬱陶しいと話には聞いていたが、何の、私の生まれ育った京都の冬だって「京の底冷え」と評される名うての冬、と高を括っていた。しかし、実際にひと冬過ごしてみると、この国の冬は京都の冬など比べものにならないほどの酷さ。今年には四年ぶりの寒波とかで、二月上旬には最低気温が氷点下十度という日が一週間ほど続き、テムズ川も流れのよどんでいるところは凍りついたほどだった。しかし、問題なのは気温の低さではなかった。秋が来ると毎日数分ずつ、本当に目に見えて屋間の時間が短

くなる。夏には十時半でも明るかったのに、年末ともなれば午後三時半頃には「夜」になってしまふ。一方、昼間ですら、空は毎日曇りに覆われて薄暗いし、太陽がまったく顔を見せない日が二週間ほど平気で続くこともある。おまけに建物の中は「間接照明」とくから、とにかくどこもかも暗いのだ。だから、夏目漱石ならすとも気分が暗くなるのは自然のなり行き。

というわけで、イギリスの四季を、日本のように気温で特徴づけるのは適切ではない。(実際、ここでは、今日ノースリーブを着ていても、明日は手袋をはめるということが起こりうる)。しかし、昼と夜の境界線は大きく移動

するから、これで夏と冬を特徴づけることが出来る。つまり、夏は夜が長い、冬は夜が長い。春と秋は、夏と冬の間季節。

しかし、一時はこのまま永遠に春なんかやって来ないのではないかと思われた冬も、三月中旬になると、少しずつ勢力が衰えて来るのが分かる。見た目はカラスと大差ないブラックバードが天は二物を与えないことを自ら立証するかの様に夜明け前から羞声で鳴き始めるし、足もとの草の間からは花芽が顔を見せ始める。

この時期、町なかで一番目につく花は水仙。家々の前の小さな庭や公園で、大小黄白取り混ぜたいろいろな種類の水仙が一斉に咲き始めるのを見ると、日本ではどうして水仙郷などというお金を取って水仙を見せる場所が成立しているのか不思議に思えてしまう。

と、そのうちに、教会の庭や、校庭の片隅など、あちこちで桜が咲き始め

た。並木こそないが、樹齡を感じさせる実に立派な大木ばかり。それと相前後して、柳が目吹き、れんぎょうも鮮やかな黄色い花を咲かせると、これはもう日本の春とほとんど違わない。

そこで、嬉しくなって、自分がさっぱりとした性格だと思っている日本人が、桜の花を指さしながら「私の性格は、日本ではこの桜の花のようだと書かれていますが」とイギリス人に言ったとすると、ここで誤解が生まれることになる。イギリス人は、おそらく、彼の性格を「往生際が悪い」と取るに違いない。というのは、イギリスの桜は、三週間以上も満開の状態を保ち続けるのだ。途中、激しい雨が降っても強い風が吹いても、頑として散らうとしない。私は今日こそが最高の満開だと思って何度写真も撮ったことか（八月号本稿写真参照）。世の中には、何とかあ散り際の悪い桜があるものだと、最後には私も呆れてしまった。四季がイギリスと日本とで違うように、見た目



ロンドン・ドックランドでの「全英ビール祭」

は同じ桜でもイギリスと日本とは同じではないのだ。

同様に、イギリスの「アカウンタント」と日本の「会計士」は同一ではない。

い。(ちょっと牽強付会のような気がしないでもないが……)。
先ず、イギリスには本当にびっくりするほどたくさんアカウンタントが

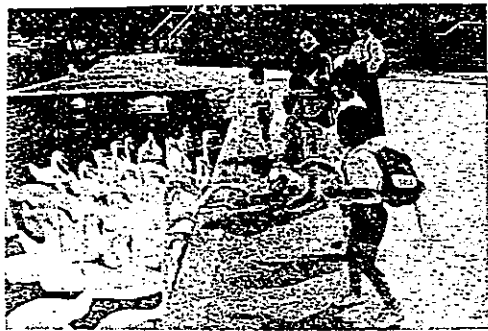
いる。英和辞典をひくとアカウンタントには「会計係、主計官、会計士」という訳がつけられているという意味だけではない。イギリスには独立の専門職としてのアカウンタントの団体が約一ダースもあり、その中の六つの主要な協会のメンバーだけで十七万人以上と、「有資格」のアカウンタントの数の何と多いこと。

実際、町を歩いていると、「ソリシター」と「アカウンタント」の看板をやたら見かける。個人のアカウンタントの事務所はおおむね日本の個人会計事務所と印象が似ているが、いわゆるビッグ・シックス級の大会計士事務所になると、それはもう、惚れ惚れするような大きなビルに入っている。さぞかし金回りが良いのだろうと、思わず立ち止まってその看板を見上げてしまつ。

それを裏づけるように、この国では、毎年、大学を卒業して就職する人たちの約一割(一)をアカウンタントの業

界が吸収している。これは、優秀な人材を求めている業界にとっては本当に羨ましいことなのだろう。『タイムズ』の日曜版について来るグラフ誌で、飛行機ごっこをしている少年の写真の上に「正直言って、あなたはチャーター・アカウンタントごっこをして遊んでいた友達を知っていますか?」というキャプションのつけられた見聞き広告を見た。広告主は、何とガルフ戦争で名を馳せた英国空軍。目先の欲に吊られて不動産会社や銀行に就職する友達のように、一生を机の前に坐って過ごすより、音速の二倍の速さで飛ぶトルネードを操縦してみたくありませんか。あなたに才能があれば、二千三百万ポンドの飛行機を操縦するあなたに三百萬ポンドを投資します、といった説明がついている。(その三百萬ポンドをくれるわけでもないし、戦死するかも知れないと書いてある? とは家内の弁)。思わず笑ったことに、この金額を示した文章の後に「複雑な計算を

することを夢見ているあなたの友達に印象づけるために、数字を二つ示しました」という、いかにもアカウンタントを意識したカッコ書きがつけられて



近くのテムズ河畔で

いた。

また、ラジオでも「アカウンタントになりませんか」というスポット広告をたびたび耳にする。不景気にも強い

アカウンタント、というわけらしい。ちなみに、オックスフォード大学の専任講師の年俸が税込み一万六千ポンド程度なのに、有資格のアカウンタントは若い人でも軽く二万ポンド以上を稼ぐ。そこで、大学でのパーティーなどの席上、会計・監査を専攻していると自己紹介すると、どんなことをしているか分からないのに稼ぎまくるアカウンタントという職業は羨ましいね、と片目をつむる教授にしょっちゃん出くわすこととなる(当然、彼らは会計学や法律学を専攻しているのではない)。

ここで、私の頭に「?」と「!」が浮かぶ。よくまあこれだけ多くのアカウンタントを食わせるパイがこの国にあるものだと。

この国の人々の生活を垣間見ていると、そのキーワードの一つが「情報」で、他の一つが「モニタリング」ではないだろうかと思うようになった。先ず情報。この国では、公的な情報

は無料か、非常に安い料金で一般の人々にも入手出来る。手許にHMSOで買った英国国鉄のアニニアル・レポートがあるが、このカラフルな小冊子を最初に見た時、日本の国鉄も、毎年こんな報告書を手近なところで国民に提供していたら、あんなに赤字を背負いこむ前に何とかしなければならぬと議論がおこったのではないだろうかと感じた。また、この連載の第一回目にも書いたが、どこかの国と違って国政に関する情報も出し惜しみされているという印象はない(但し、百パーセントそうだという保証はない。チュエルノブイリ原発の事故の際、原子力発電を推進していたこの国で放射能汚染に関する情報がほとんど入手出来なかったというのはちょうどその頃マンチェスターに留学していた友人の実体験だし、昨年春には国を挙げての大問題だった「狂牛病」も今ではまったく人口に上らず、私も平気でステーキを食べるようになってしまっている)。



パースの公園での無料アトラクション

それに対して、私的な情報は有料でも高価。シティーの日本企業に勤める知人がはやっていたが、アカウナントに相談するたびに莫大な請求書

が届く。たとえアカウナントの勉強不足だと思われるような事柄でも、腹することなく堂々と請求書を送り届けに来るし、後でそのアカウナントが

他の日本企業からベネフィットを得られることが確かな事柄でも、規定通りに請求する。日本人の感覚だと、それらは顧問料に含まれていて当然ではないかと思えるのだろう。

イギリス人が情報のような無形のものにも価値をはっきりと認識していることは、大学のコピー機に必ず著作権に関する注意書きが貼りつけてあることや、この国にレンタル・レコード屋がないことから想像出来る。

そのような国で、ファイナンスのための情報を豊富に有しているアカウナントに対してそれ相応の報酬が支払われるのは当然のことだろう。

しかし、イギリスのアカウナントを養っているのは、このような価値のある情報に対する支払いだけではないようだ。

イギリス人は「フェア」という言葉を非常に大切にしている。従って、ある事柄がフェアに処理されているかどうかということこそモニタリングすることに

イギリス人が払う関心も並大抵のものではない。

例えば、この国のテレビやラジオの放送内容について不満がある場合、放送局からは独立した機関に申し立てることになっている。そして、実際に申し立てられた不満がどう処理されたかも時々報告されている。例えば、去年の秋に『ニッポン』と題する連続ドキュメンタリー番組がBBCで放送された。なかなか見応えのある番組で私も毎週ほとんど欠かさず見たが、先日、それに関する苦情が放送苦情委員会でのように処理されたかが放送された。その苦情は、番組中、戦後の日本の占領政策についてアメリカばかりが大きく取り扱われたのは「アンフェア」だという内容。委員会で検討した結果、イギリスおよび英連邦の占領軍の功績も大きいことは事実だが、アメリカの功績と比較するとそれほど大きくはない、従って、番組内容はアンフェアではないとの結論に達したと。さ

らに詳しいことを知りたければ次の宛先に切手貼付の封筒を送って下さいと締めくくられていた。

前回書いたようにいくらアカウナティーが能動的でも、アカウナターにアカウナタビリティを果たさせるためには彼らをモニタリングするシステムが整備されていることが必要だということが広く認識されているのだろう。

このことは、国政に関するモニタリングを見ても想像出来る。国会の開会中は毎日午後三時から論戦(まぎしく!)をテレビで生中継するし、当日の夜と翌朝八時十五分からは編纂されたものが放送される。さらに、驚いたことには、テレビだけでなく、有料の電話サービスの他にも、フットボールの試合結果速報と並んで、「国会中継」がある。日本でも有料電話が花盛りと聞くが、国会中継がビジネスとして成立するとはとても思えない。

また、その名も『ワッチドッグ』と

いうテレビ番組がある。誇大宣伝や欠陥商品の販売で損害を被った視聴者がテレビ局に通報し、レポーターがその企業に乗り込んで担当者に釈明を迫る。テレビカメラから逃げ回る悪徳業者の姿を見てみると、その昔、モーニングショーだったかで、蒸発した夫や妻を捜し回るコーナーがあったことを思い出した。(ああ、あまりと言えばあまりに日本的な...)『ザッツ・ライフ』というBBCの番組では、その冒頭、耳たぶを上手に耳の穴に押し込むことの出来る男の子が登場したりしてスタジオ参加者の笑いを誘うので、日本にも同種の番組があるなあと郷愁を誘われたりするが、その最初の数分間が終わると、これも消費者運動の内容になる。

こういったモニタリングの中でも、特に国民生活と大きな関係を持つ経済発展に関するモニタリングに重要な役割を果たしている独立の専門家としてのアカウナントの存在には、この

現状をもたらしただけではないか。そして、その頃から専門職として発展し始めたアカウンタントは、独立の第三者の立場で、経済発展のスピードがイギリス人にとってフェアかどうかを判断しているのではないだろうかと思えるのだ。

つまり、この拙文の表題「黄昏ではなく曇天のイギリスから」が意味しているこの国の「曇天」を、維持しているのがアカウンタントではないか、そして、国民がそれを望み、そのためのコストを喜んで負担しているように思えてならない。

(筆者・在イギリス・同志社大学 助教授)

国で特別の社会的評価が与えられているようにだ。

しかもそのアカウンタントは、独立の専門家として活動するだけでなく、いろいろな組織の中に入りこんでいる。例えば、大規模株式会社組織図の一例を見ると、代表取締役を始めとして、財務担当重役、主任会計士、内部監査人、税務担当部長、財務会計士、管理会計士、予算会計士など、有資格のアカウンタントのポストが目印押し。以前見た放送大学の『アニュアル・レポートの裏側』という講義で、マークス&スペンサーの会計処理の方法を詳細に説明してくれたが、その持株会社ですべての関連会社の会計を統括している部局の女性職員三人が三人ともアカウンタントの資格を持っている。企業内の会計責任と公表財務諸表の重要性について語っていたのが非常に印象的だった。監査をする側もされる側もアカウンタントというわけ。また、パブリック・セクターで会計を取

り扱うポストにも、特にそれを専門とする協会のアカウンタントがついている。この国にSECはないが、あのギネス事件を摘発した Solutions Manual OJの専門スタッフの半数は、やはりアカウンタント。

これだけの多数のアカウンタントを養うには莫大なコストがかかっているはずだが、私は、上述の大学教授の「皮肉」にもかかわらず、イギリス人は喜んでそのコストを負担しているのではないかと感じていた。

その鍵は、イギリス経済が「英国病」にかかって斜陽になったと言われているところにあるのではないか。斜陽？ 私にはそうは思えない。この国の人たちは、依然としてゆったりと人生を楽しんでいる。レガッタを見に行けば、日が一昨日を（応援ではなく）観戦しながらビールを楽しんでいる人の数は数え切れないし（九月号本稿写真参照）、クリケットは野球と違って三時間だけりがかないどころか、

延々四日間も試合をし続ける。そしてそれを観戦する人たちが球場は満員。子供を連れて航空ショーを見に行ったら、これも朝十時から夕方七時頃まで、切れ目なしに上空を新旧取り混ぜた飛行機が飛び回り、見ている人たちは、自家用車のFMラジオで解説を聞きながら、日光浴を楽しんでいる。週に一度私のフラットを掃除してくれるクリナーのデニスは、夏休みに入ってから一週間か二週間単位のホリデーをもつ四回も取っている。こんな国が斜陽のはずがないではないか。

私には、わざと経済発展のスピードを落としたり、いわば「確信犯」に思えて仕方がない。というのは、イギリスが産業革命を盛んに推し進めていて最先端の経済大国だった頃、イギリス中の農地が工場になり、ビルの屋上で麦が栽培されるようになるのではないかとまで言われるようになったが、この国の人々はその望まなかった。その結果が、黄昏と酷評される

格調高い会計学書

番場嘉一郎著	詳説企業会計原則 (全訂版)	210頁	定価2,100円
加藤盛弘著	現代の会計原則(改訂増補版)	210頁	定価2,100円
五十嵐邦正著	静的貸借対照表論	210頁	定価2,100円
木下勝一著	会計規準の形成	210頁	定価2,100円
佐藤博明著	ドイツ会計制度	210頁	定価2,100円
鈴木義夫著	現代会計論	210頁	定価2,100円
岡下敏著	精説財務会計	210頁	定価2,100円
興津裕康著	現代財務会計	210頁	定価2,100円
内川菊義	中村義彦 編著 簿記	210頁	定価2,100円
菊地和聖編	企業簿記概論(改訂新版)	210頁	定価2,100円
泉谷勝美著	現代簿記精説	210頁	定価2,100円
河野一英著	監査実務	210頁	定価2,100円

*価格は消費税が含まれております。

森山書店刊